

平成 10 年 度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成 10 年度

教 育 研 究 員 名 簿

学級活動・低学年

	地区	学校名	氏名	備考
1	新宿	津久戸小	岡野 隆	○
2	大田	大森第一小	小川直子	
3	世田谷	八幡小	齋藤厚代	
4	足立	東加平小	曾根節子	□
5	八王子	陶鎔小	土屋静恵	

- ◎ 全体世話人
- 分科会世話人
- 分科会副世話人

学級活動・中学年

	地区	学校名	氏名	備考
1	墨田	第五吾嬬小	鎌田康史	
2	品川	第二日野小	圓山賢吾	
3	渋谷	中幡小	金子晶子	□
4	中野	野方小	氣田眞由美	
5	板橋	徳丸小	大野理恵子	
6	調布	若葉小	鈴木 潤	
7	小金井	東 小	中村紀子	
8	稲城	長峰小	相馬季子	○

学級活動・高学年

	地区	学校名	氏名	備考
1	杉並	若杉小	石田孝士	
2	練馬	早宮小	佐野 匡	◎
3	葛飾	道上小	磯 香織	
4	江戸川	東小松川小	植松佳代子	
5	世田谷	池之上小	廣瀬維謙	
6	三鷹	第二小	内野睦美	
7	東久留米	第三小	平松隆行	
8	多摩	諏訪小	佐藤美德	□

児童会活動

	地区	学校名	氏名	備考
1	江東	東陽小	山田幾世	
2	武蔵野	関前南小	飯田信夫	
3	豊島	池袋第五小	花田卓郎	○
4	足立	花畑小	佐藤美和	
5	江戸川	篠崎第三小	鈴木哲男	
6	八王子	山田小	五十嵐弥生	
7	小平	小平第十五小	藤原栄子	
8	多摩	連光寺小	長谷川千尋	□

担 当 東京都教育庁指導部初等教育指導課指導主事

吉 本 恒 幸

一人一人のよさや可能性が生きる集団活動を通して、
児童の自主的・実践的な態度を育てる指導の工夫

目 次

I 研究の概要	2
II おもいきりやってみよう みんなで学級活動 —— ひびきあう集団活動の指導の工夫 —— (学級活動低学年分科会)	3
III 「みんなで活動することって楽しいな」と思える学級活動を目指して (学級活動中学年分科会)	8
IV みとめ合い・かかわり合い、みんなで高まり合う学級活動 (学級活動高学年分科会)	13
V かかわり合う喜びのもてる児童会活動 —— 代表委員会活動への支援の工夫 —— (児童会活動分科会)	18
VI 研究のまとめ	24

<要 約>

特別活動は、望ましい集団活動を通して、児童一人一人が自分のよさや可能性が発揮できるようにするとともに、友達のよさを認め合える場を確保し、学級生活や学校生活をさらに向上させようとする自主的・実践的な態度を育成することが必要である。そこで本年度は上記の共通研究主題を設定し、児童の側に立つ指導の工夫を探ることにした。

研究を進めるに当たっては、4つの分科会を構成した。各分科会では、特別活動実践上の課題を踏まえ、児童の学ぶ姿勢をとらえながら指導の工夫について研究した。

I 研究の大要

共通研究主題

一人一人のよさや可能性が生きる集団活動を通して、
児童の自主的・実践的な態度を育てる指導の工夫

今日の科学技術の急激な進歩に加え、核家族化、少子化、地域社会の連帯感の希薄化などの現象が進んでいる中、学校においては学校週5日制の時代を間近に迎え、学校教育の在り方そのものが問われるようになってきた。

社会の変化は、子どもの生活において、人間関係が希薄になったり、体験を通じた活動が不足したりする結果を招き、子どもたちのものの見方や考え方にも大きな影響を及ぼしている。

教育課程審議会「審議のまとめ」の特別活動の現状と課題にも「学級活動では、教師の指導の下では活発に活動するが、児童生徒が自主的に集団生活上の問題を解決するなどの点においては必ずしも十分ではない。」「児童生徒の人間関係や連帯感、集団の一員としての自覚や責任感の希薄化、体験不足が問題になる中で、家庭や地域との連携を図りながら、自然体験や地域の人々との幅広い交流など社会体験等を充実する必要がある。」とある。

特別活動部会では、望ましい集団活動を通して、一人一人が自分のよさや可能性を発揮できるようにするとともに、友達よさをみとめ合い、自分たちの力で学級生活や学校生活の充実と向上を目指そうとする自主的・実践的な態度を育成することが課題であると考え、本研究主題を設定した。

以上のことから、本年度は、下記のこと重点をおいて研究を進めることにした。

- ・子ども一人一人が問題意識をもちながら活動に取り組むことで、一人一人のよさや可能性に気づき、創造力を発揮できるような場の設定や指導、評価の在り方を工夫すること。
- ・望ましい集団活動を通して、互いのよさを認め合い、高め合っていくことができる人間関係を育成すること。
- ・一人一人の個性を生かしながら、役割を分担して活動できる場を確保し、子どもたちの自己実現への支援の在り方を追求すること。
- ・意図的、計画的な指導の下に、活動内容を厳選すること。

なお、研究を進めるに当たって、各分科会は次のような研究主題を設定し、共通主題に迫ることにした。

- ・学級活動低学年分科会

おもいきりやってみよう みんなで学級活動

—— ひびきあう集団活動の指導の工夫 ——

- ・学級活動中学年分科会

「みんなで活動することって楽しいな」と思える学級活動を目指して

- ・学級活動高学年分科会

みとめ合い・かかわり合い、みんなで高まり合う学級活動

- ・児童会活動分科会

かかわり合う喜びのもてる児童会活動

—— 代表委員会活動への支援の工夫 ——

Ⅱ おもいきりやってみよう…みんなで学級活動

— ひびき合う集団活動の指導の工夫 —

(学級活動低学年分科会)

1 主題設定の理由

低学年という時期は、発達段階からみると集団活動の基礎を築く大切な時期である。子どもたちはあらゆることに興味を示し、意欲的に活動していくようになる。したがって、あたたかい人間関係の触れ合いを通して、集団活動の楽しさを体験し、自主的、実践的な態度の基礎を養うことが重要である。

しかし、現在の子どもをみると、自分の思い通りにならないと暴れる、わがままな言動をとるなどの自己中心的な行為を示すことが多い。また、兄弟姉妹や友達との切磋琢磨が少ない、友達とのトラブルを自己修復できないなど、子ども同士の間人間関係を調整する能力が低下しているという問題点があげられる。

新学習指導要領案において重視されている点として、「家庭や地域との連携を図りながら多面的に児童を育てる。」「体験を豊富にし、児童の自発的、自治的な活動を一層活発にする。」があげられている。

そこで、低学年分科会では、研究を進めるに当たって、目指す児童像について以下のように考えた。

— 目指す児童像 —

1. 人の話を聞き入れられる子
2. 自分のやってみたいことを表現できる子
3. みんなと一緒に活動できる子
4. またやってみようという意欲がもてる子

そのためには、まず、友達の意見を素直に聞いたり、自分の考えを素直に表現できたりするように指導を工夫することが大切であると考えた。そして、何でも聞き・話し合える活動を繰り返し行うことによって、互いに認め合える子どもを育てたいと考えた。さらに、いつでも、だれとでもできる活動を通して、喜びや感動を共有できた時、「またいっしょにやってみよう」というあたたかい人間関係が育つと考え、本主題を設定した。

〇〇さんの考えも
いいね。



ねえ、みんな。
こんなこともやっ
てみたいな。

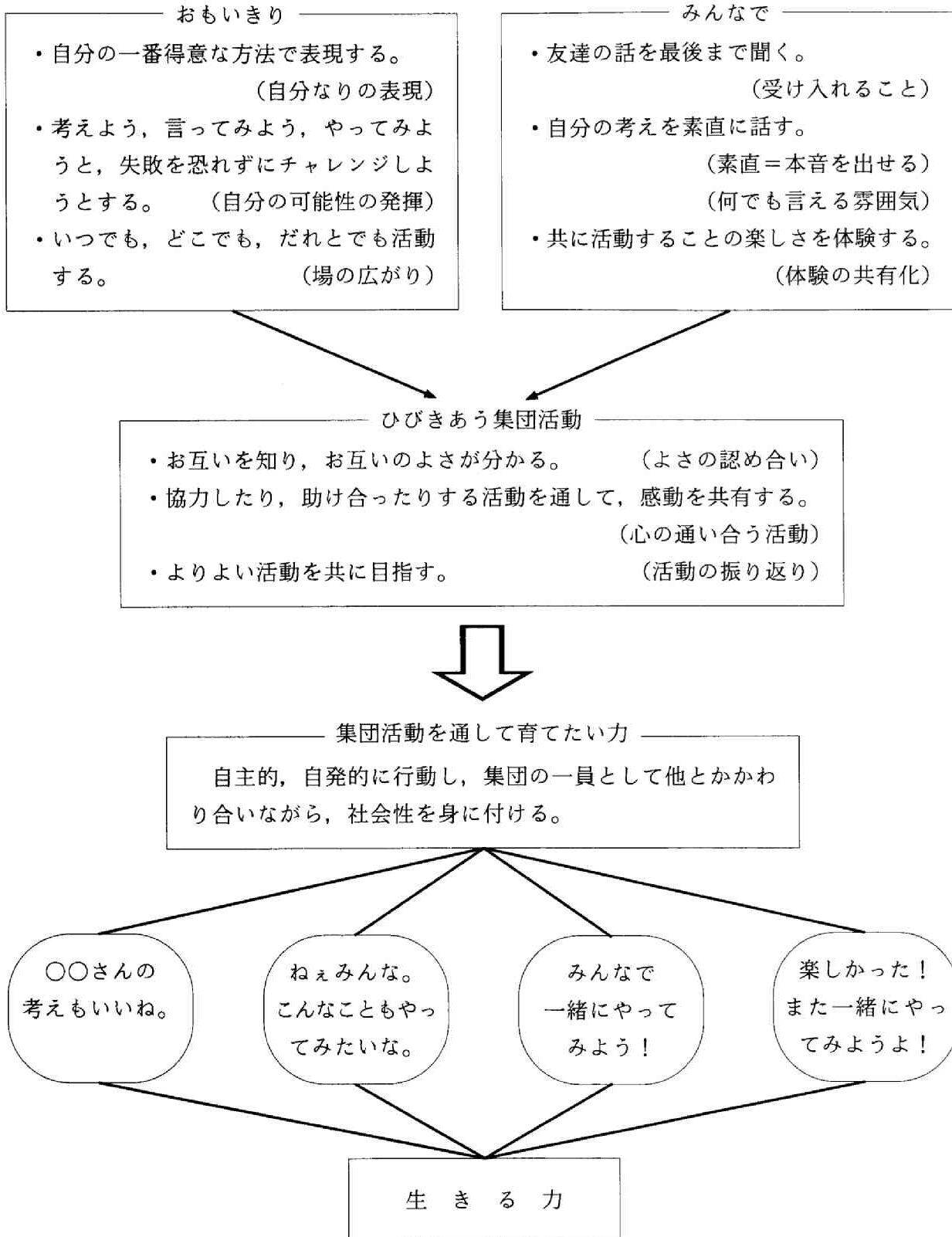
みんなでいっしょに
やってみようよ！



楽しかった！
またいっしょに
やってみようよ！

また、本分科会では、研究主題にある「おもいきり」、「みんなで」、「ひびきあう」を以下のようにとらえ、主題に迫った。

〔研究主題のとらえかた〕



2 研究仮説と研究の視点

研究仮説

一人一人の思いを聞き・話し合える活動と、いつでも・どこでも・だれとでもできる活動を工夫すれば、ひびきあう集団になり、「やってよかった。」「またいっしょにやってみよう。」というあたたかい人間関係が育つであろう。

研究の視点

〔視点1〕一人一人の思いを聞き・話し合える活動の工夫

- ①思いを受け止める場の工夫
 - ・小集団での話し合いの時間の設定
 - ・議題集めの工夫（カード、日記など）
 - ・学級活動コーナーの充実
 - ・子ども同士の教え合い
 - ・座席の配置の工夫
 - ・子どものふれあいの時間の確保
- ②互いのよさを気付かせるための工夫
 - ・子どものつぶやきに対する教師の気付き
 - ・日常生活の中でのよさの認め合い
 - ・活動後の振り返り
 - ・朝・帰りの会、学習時の認め合いの時間の確保



〔小集団による話し合い〕

〔視点2〕いつでも・どこでも・だれとでもできる活動の工夫

- ①広がり場の設定
 - ・場所や人間関係など、楽しさの体験が広がる工夫

広がり場とは

- 異年齢集団の活動
 - 他教科・領域と関連した活動
 - ボランティア活動
 - 地域社会と関連した活動
 - 学年間の交流活動 など
- ②興味・関心・意欲をもたせる工夫
 - ・実践したことの提示
 - ・新しい活動に気付かせるための情報提供
 - ・次への意欲につながる教師の助言
 - ・活動の見通しをもたせる手だて、言葉かけ、掲示
 - ・子どもをとりまく環境づくり
 - ・学級活動グッズの活用

3 研究内容

実践事例1 議題「6年生といっしょにやるものをきめよう」(1年)

<活動の概要>

【事前の活動】 入学から半年。学校に慣れるまでずっとお世話をしてくれた6年生。仲良くなって引き続き遊んでもらっている1年生が、お礼の意味も込めて、6年生と一緒に遊ぶ計画を自分たちで立てようという議題でひまわり会議を開いた。事前に、どんなことを計画したら楽しんでもらえるか、他の学年の人たちはどんな遊びをしているかを取材した。

【事中の活動】 司会グループは、意見を短冊に書いて床に並べ、時には教師の支援を受けながら話を進め、子どもたちは意見を出し合った。自分たちで考えたゲームをやる、お店屋さんを開く、一緒に給食を食べるなど6年生も喜んでくれそうなものを考え出した。たくさん出た意見は、今回取り上げられなくても、違う形で必ず実践できることを保証した。(学級でまたは1・2年の合同で行う。)その結果、自分の意見が認められた喜びを感じ、自分たちでまた話し合っていこうという姿勢が見られるようになった。

【事後の活動】 話し合いは、ゲーム屋さん、一緒に給食を食べるという2種類に決まり、4グループに分かれ4つのゲーム屋さんの準備をした。また、招待状を書き、当日はランチルームで給食会を開いた。心の準備として話し合いで出たことは、招待してきてもらう時は声をかける、折り紙でおみやげを作って渡しながらかお礼を言うなど、心情面での成長も見られた。そして子どもたちの心の中にはひまわり会議は楽しいという気持ちがますます育ってきている。

<考察>

視点1 一人一人の思いを聞き・話し合える活動の工夫

まず子ども同士がお互いにすぐ見えるよう、円くなり話し合った。そして、友達に分かってもらうために黒板に書いて説明する、実際に円の中央でやってみせるなどみんなが十分に理解し合えるよう、具体的な活動を取り入れた。

また、一人一人のつぶやきを大事にし、となりの人たちと相談して、グループで意見を出し合う方法もとった。

視点2 いつでも・どこでも・だれとでもできる活動の工夫

6年生とのかかわりなど自分のまわりへ関心を向けるため、6年生と遊んでいる場面を写真に撮って掲示したり、『子どもまつり』が近かったため、それぞれの学級ではどのようなゲームの準備をしているか取材させたりした。そうすることにより視野が広がり、たくさんの意見を引き出すことができ、また自分で考えたゲームを紹介してもいいんだという意見も生まれた。

実践事例2 議題「みんなに楽しんでもらえるおみせやさんをひらこう」(2年)

<活動の概要>

【事前の活動】 2学期に代表委員会主催でお店屋さん形式の全校集会が開かれることになった。2年生は、お店を出すのは自由であるが、子どもたちになげかけたところ、「昨年クラスでやってみて楽しかったからまたやりたい。」「今度は他の学年の人たちにも楽しんでもらいたい。」との理由で参加することとなった。事前の話し合いで、たからつり、ビー玉

ロケットをやることに決まった。そして、本時に備え、グループ毎にやり方を相談し、自分たちの考えを発表する準備を行った。

【**事中の活動**】 本時は、お店のやり方を話し合うことになった。まず、各グループ毎にやり方の説明を行い、それに基づいて自分の考えを発表する形で話し合いを進めた。子どもたちの中にこだわりがあり、なかなか歩み寄りが見られなかったので、提案されたやり方を実際に行ってみた。その結果、よりよいやり方にまとめることができた。

【**事後の活動**】 その後、係分担を行い、係毎に仕事を進めた。また、生活科、図工の時間の関連を図り景品作りを行った。当日は大勢の人が来店してくれ、一人一人がお店番として意欲的に活動していた。また、お客さんとしても自分の店にほとんどの子が来ていた。

<考 察>

視点1 一人一人の思いを聞き・話し合える活動の工夫

学級の実態として、何回も発言する活発な子がいる一方、はずかしくて自分の意見を言えない子がいる。そのため、小集団で話し合うという場の工夫を行い、本事例では事前にグループでの話し合いの場を設けた。その中では、ほぼ全員の子が自分の意見を言うことができ、本時でもグループからの発表として活動できた。また、話し合いの中で、意見が対立した時にグループでの話し合いを行い、友達の意見をさらに聞き合うことにより、意見が整理された。

視点2 いつでも・どこでも・だれとでもできる活動の工夫

本議題は、広がりのある場で活動させることをねらいとし、1年生から6年生までの全学年が一つの行事に取り組む、という異年齢集団の活動と位置付けられる。低学年なりに「自分たちだけでなく、他の学年の人にも楽しんでもらえるように」を合言葉に、やり方の相談、景品作りに取り組んできた。終わった後、「話し合いはなかなか決まらなくて大変だったけど、やってよかった。」「またクラスでやってみたい。」との声が聞かれた。

4 まとめ

(1) 研究の成果

- ・ 学級活動を学級だけの活動にとどめず、異年齢集団活動を取り入れたり、学年活動、地域と一緒に活動など思いきりやってみたいことを取り上げて活動を試みた。「こんなこともできる」と楽しさの体験が広がり、意欲的な活動ができた。
- ・ 興味・関心・意欲を高めるために、話し合いに関連した情報を視覚的に集めて利用したことは、話し合いを活発にするのに役立った。また、事前・事中・事後の活動をできるだけ短期間に実践することが、活動の活性化に効果があった。
- ・ 「よかったカード」「ありがとうカード」など学級活動を工夫し、活動後に自分のがんばりや友達のよさを振り返る活動を続けることで、一人一人の思いを聞き・話し合える活動ができた。これからの活動を通して、あたたかい人間関係が育ってきている。

(2) 今後の課題

- ・ ひびきあう集団活動をさらに体験し、活動の場を広げていきたい。
- ・ 話し合いがうまくいかない時の助言のしかたや、低学年でも自分たちの力でできる活動の支援のしかたを場面に応じて活用できるよう工夫したい。

Ⅲ 「みんなで活動することって楽しいな」と思える学級活動を目指して (学級活動中学年分科会)

1 研究主題設定の理由

中学年の子どもたちは、集団での行動に対する強い興味や関心をもつようになり、集団での活動が活発になってくる。理解力も発達し、自己中心的な傾向の中にも、物事の善悪について客観的に判断できる様子が見られるようになってくる。また、自分の事は自分で決めようとし始め、自主的に活動しようとする意欲が強くなる。

本分科会所属校の児童においても、日常の観察や、児童へのアンケートからこのような傾向は確認できた。また全般的に、意欲的で好奇心が強く、元気であること。「この学級になってよかった」という思いがあることが分かった。しかし一方、みんなの役に立ちたいと思っているが、役に立っていると感じられない。友達とかかわりたいという思いが、根底にはあるものの、かかわり方がわからず、結果的に自分からかかわろうという意識は薄くなっているという課題のあることも、明らかになった。

このようなことから、集団への関心が強まり、自主的に行動する意欲が高まる中学年の児童にとって、人とかかわる方法を知り、人から認められる経験を積むことが重要な課題であるとの認識をもった。

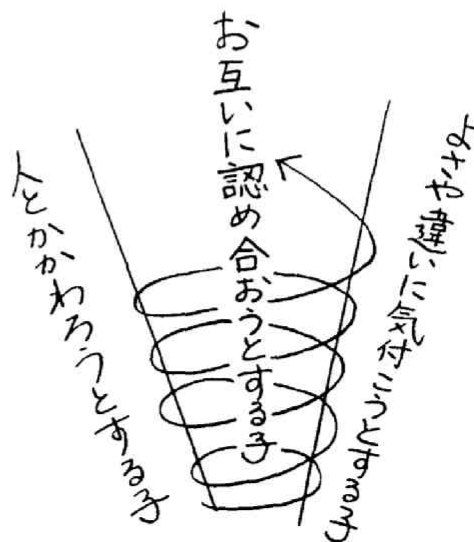
そこで、本分科会ではこの課題に対して、活動の基盤となる全学校生活を通して「心をやわらげる活動」や「人とかかわり方の指導」を行うことを重視するとともに、学級活動においては、「人とかかわりを広げ、深める指導の工夫」と「意欲を引き出す指導の工夫」をすることで、「児童の思いを大切に活動」が更に活性化するものと考えた。そして、活動の流れの中で児童の思いを大切に、一人一人のよさや可能性を生かしつつその思いを成し遂げさせることを目指した。そのことで、達成感、満足感を味わわせ次の活動の意欲を引き出し、自主的・実践的な態度を育てようと考えた。

以上のことから、かかわり合いを大切に、自分たちの力で活動しようとすることを「みんなで活動する」、活動の中で達成感や満足感をもつことを「楽しいと思える」ととらえ、『みんなで活動することって楽しいな』と思える学級活動を目指して』という本分科会主題を設定した。

2 目指す児童像

目指す児童像として図のような三つを上げた。これらは並列ではなく、次のようなスパイラルなものと考えている。

まず、「人とかかわり」をもつ。そしてかかわることを通して、その人の「よさや違い」に気付く。そしてまたより深いかかわりをもとうとする。そこで先と違った「よさや違い」に気付く。かかわり、気付き、かかわり、気付きを繰り返していく中で、「お互いを認め合う」という気持ちが少しずつ高まり、理解が深まって行くことを目指しているのである。



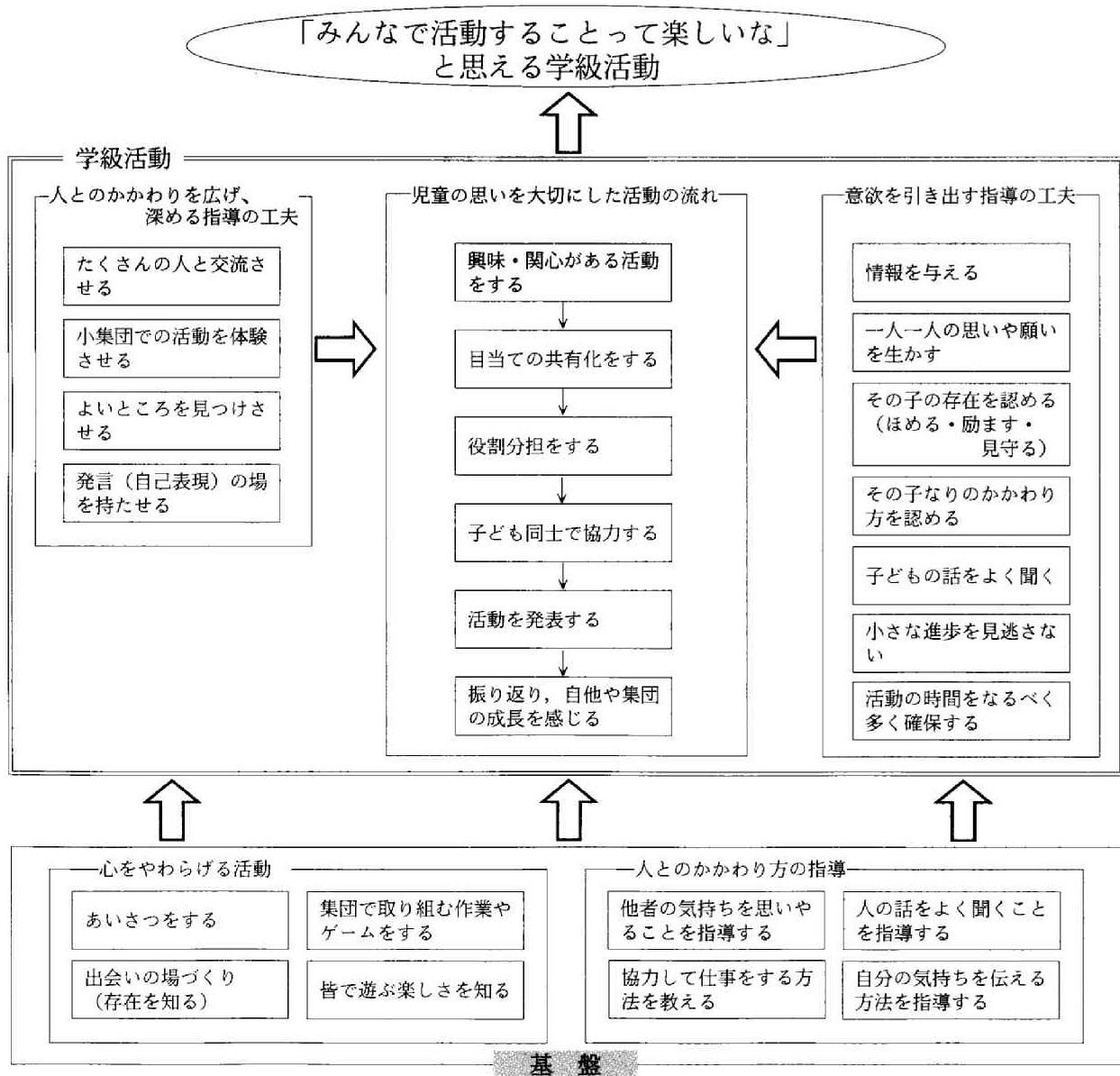
3 研究仮説

人とのかかわりを広げ、深め、意欲を引き出す指導の工夫をすれば、「みんなで活動することって楽しいな」と思える学級活動になるだろう。

4 研究の視点と手だて

視点1 人とのかかわりを広げ、深める指導の工夫
 視点2 意欲を引き出す指導の工夫

「みんなで活動することって楽しいな」と思える学級活動は、日常の生活や各教科・道徳の学習などで獲得した知識、技能、態度やそれまでの特別活動での経験を基に成り立っている。本分科会では、全学校生活を通して、意図的に「心をやわらげる活動」や「人とのかかわり方の指導」を行うことを重視し、学級活動の基盤づくりから取り組んできた。



5 研究内容

実践事例 議題「もっと、もっと、友達になろう」(4年)

<活動の概要>

【事前の活動】「男女の別なくもっといろいろな人と遊びたい。」という相談が議題として寄せられた。そこで、学級活動(2)で「男女仲良くしよう。」を指導し、道徳で資料「たった一言が」(2-2)を取り上げ、言われてうれしい言葉、いやな言葉を考えて他者への態度について振り返った。そして、学級目標“こうのとりの”を見直そうのアンケートをとり、その結果をもとに学級目標の実現状況について、更によくしていくところはないかを、話し合った。その中で「もっと遊んで友達になりたい、もっと仲良くできるとよい。」という意見が出され、上記の議題を正式に取り上げ話し合うことになった。

【事中の活動】学級活動ノートに書かれた意見を司会グループがまとめたところ、A全員遊びの日を作る、Bグループ遊びをする、C趣味同士で遊ぶ、D放課後遊びの日を作る、という4つの意見に分かれたので、これらをもとに話し合った。大勢の人と遊んだ方が楽しいという理由から「全員遊びの日を作る」が多かったが、最後に「クラス遊びの日を作り、放課後は、やりたいこと(趣味)で集まったグループで遊べばよい」というまとめる意見が出て、それにみんなが賛成をした。



学級目標

こうのとりの

こ：ころのやさしいクラス

う：きうき楽しいクラス

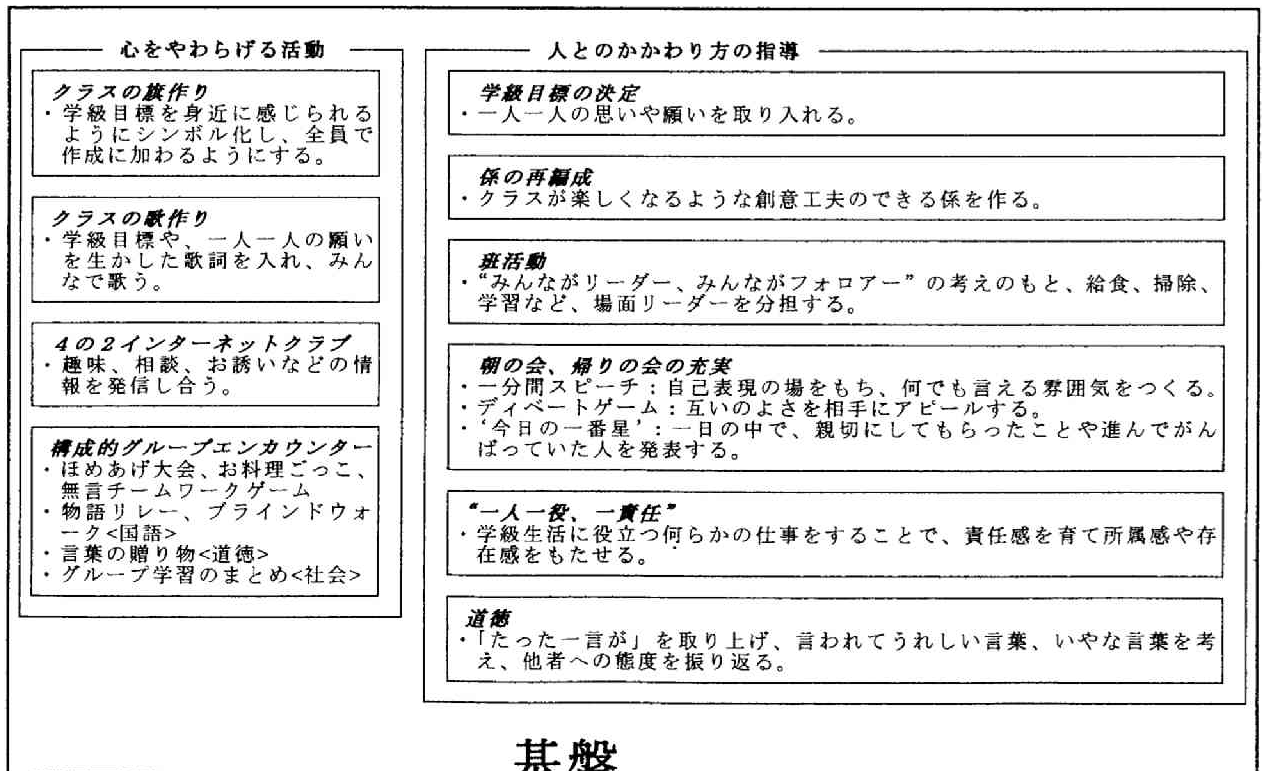
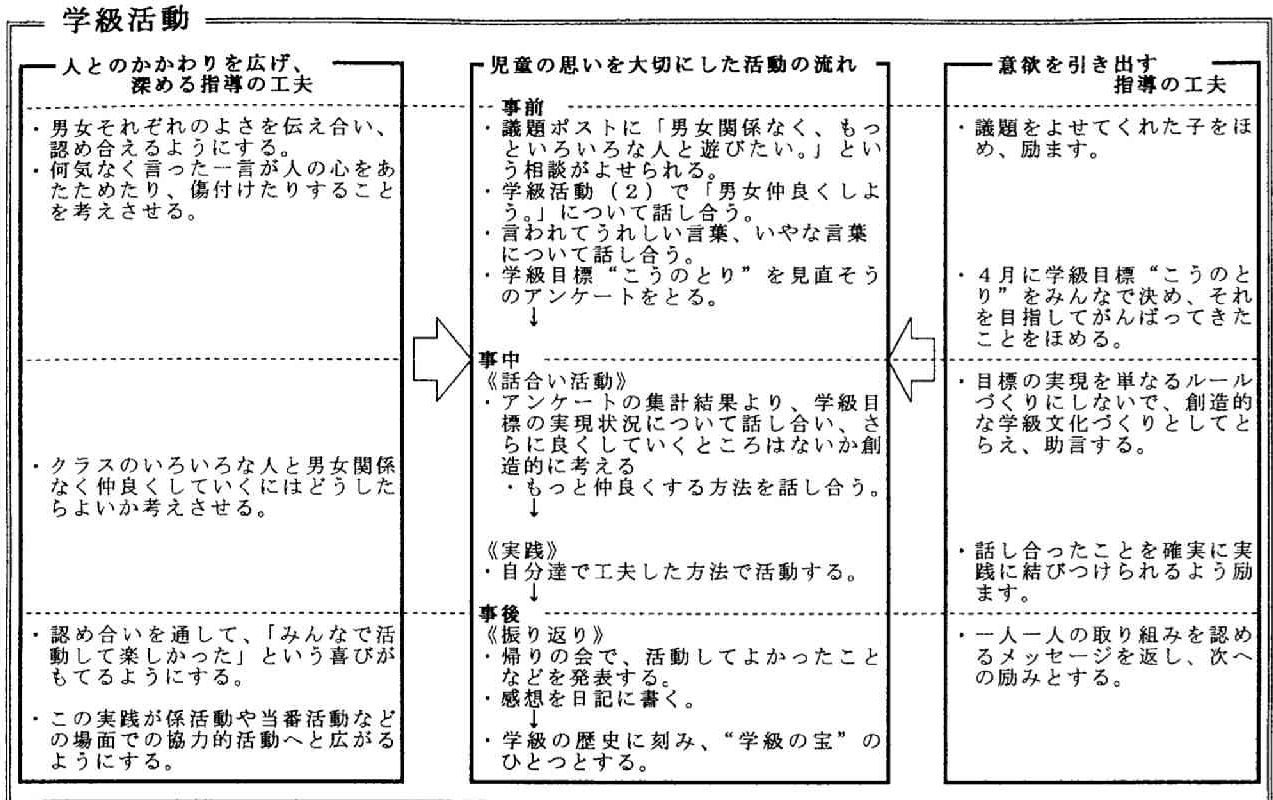
の：びのびとのびていくクラス

と：もだちを大切に、助け合うクラス

り：かいするまで話し合うクラス



【事後の活動】週一回の中休みの時間を“こうのとりのタイム”と名付け、生活班のリーダーが“遊びのリーダー”となって、みんなの希望を聞きながら遊ぶものを決め、その時間は全員で楽しそうに遊んでいる。また、放課後は男子のサッカー遊びの中に女子が入って遊んだり、一輪車が得意な女子に男子が教えてもらったり、「放課後〇〇ゲームをやる人は集合ね。」と誘い合ったりする姿も見られるようになった。その時のことで良かったことなどを帰りの会で発表したり、日記の中に「同じ人だけでなく、いろいろな人と遊ぶともっと楽しい」ということが書いてあったりして、子どもたちがみんなで活動することの楽しさを味わっていることが感じられる。



基盤

<考察>

視点1 人とのかかわりを広げ、深める指導の工夫

別表に示したように本実践では、日常的に心をやわらげる活動や人とのかかわり方の指導を重視しながら、本事例の学級活動において人とのかかわりを広げ、深める指導を行ってきた。さらに、子どもの思いを大切に、そこに教師の願いをあわせた一連の活動（事前・事中・事後）を展開して、その過程においても子どもたちのかかわりを広げるようにした。その結果、それまであまり人とかかわろうとしなかった子が友達と遊ぶようになったり、グループで行動することが多かった子が別の仲間と触れ合い、いろいろなかかわりを広げて行こうとする姿が見られるようになった。

視点2 意欲を引き出す指導の工夫

子どもたちが自分たちの学級を見つめ、もっとよくしていきたいという思いをもったことをほめ、その思いをどうやって実現していったらよいかということへの励ましをした。そして、子どもたちなりにどんな方法を考えてくれるか子どもたちを信じて任せた。自分たちで考えて話し合ったことを実践したことで、みんな一つのことをやり遂げた喜びをもち、その満足感や達成感がまた次の活動への意欲を引き出し、「クラスみんなで交換日記がやりたいな。」という声が聞かれるようになった。

6 まとめ

(1) 研究の成果

「心をやわらげる活動」や「人とのかかわり方の指導」を、全学校生活において、意図的に組み入れていったことにより、互いの心の垣根を下げ、かかわり合おうとし、認め合おうとする気持ちが育ってきた。そのことが基盤となって、自主的・実践的活動につながっていった。

視点1 人とのかかわりを広げ、深める指導の工夫

- ・ よいところを見つけ、異学年との交流、小集団での活動など指導の工夫を重ねることにより、子どもたちの中によさや違いに気づき、認め合おうとする気持ちが育っている。

視点2 意欲を引き出す指導の工夫

- ・ 学級活動ノート、話合いのための事前のアンケート、「ふりかえりカード」を通して、一人一人の思いや願いを全体に返し励ますことで、活動への意欲を引き出すことができた。

(2) 今後の課題

人とのかかわりを広げるために、学級、学年、異学年とかかわりの場を工夫してきた。この体験が一過性のものにならないためにも、活動を振り返ることにより、自らの成長に気付くような新たな手だてを工夫したい。更に様々な体験を積み重ねることにより、かかわりを深めさせたい。また、教師が「児童を見取る力」を付け適切な助言をすることにより、自分たちの力で活動しようとする意欲を引き出していきたい。

IV みとめ合い・かかわり合い、みんなで高まり合う学級活動

(学級活動高学年分科会)

1 主題設定の理由

高学年は、集団への所属意識が一段と高まる時期である。また、それに伴い、認められ、役に立つことで、集団の高まりに寄与したいという願いが行動や態度に表れるようになる。一方、現在の児童の実態を、より一般的な視点からとらえると、二つの側面が見えてくる。

- 多様な情報を素直に受け止める。
- みんなと仲良くしたいと思っている。
- 認められたい、役に立ちたいという願いをもっている。
- 与えられた課題はやり遂げようとする。

- 自分なりの判断ができず、周囲と同じであろうとする。
- 他者の考えを受け止めることが十分でない。
- 自分や友達のよさを認め合うことが少ない。
- 生活上の問題に気付くが、行動に表せない。

そこで、特別活動においては、児童が望ましい集団活動を通して、

- ・互いのよさや活動、役割を認めあい、かかわり合いながら、人間関係を広め、深める。
 - ・自ら課題を身だし、自分なりの考えや方法で解決しようとする意欲や態度を育てる。
- ことが求められていると考えられる。

さらに、本分科会で行った学級活動の実態調査からは、よりよい学級にするための意見を持ち、みんなの役に立つことが嬉しいと思っているが、表現の仕方が分からない・友達の意見をうまく取り入れられないなど、児童の姿が浮き彫りになってきた。これを受け、目指す児童像を次のように設定した。

- ・自分の考えをはっきり言える子・相手の考えを大切にできる子・自己決定できる子
- ・友達の長所や短所を受け止められる子
- ・友達の考えと自分の考えを比べて、考えられる子
- ・みんなの思いを生かそうとする子

以上のことから、高学年の学級活動では、存在やよさが認め合える集団の中で、問題解決的な活動を通して、自己存在感や自己有用感、成就感、達成感などプラスの感情経験を積み重ねていくことが、一人一人の児童の意欲を高め、さらに集団をも高めていくことになることと考え、本研究主題を設定した。なお、研究主題にあるキーワードを以下のようにとらえた。

「みとめる」とは……その子の存在そのものを知ること、よさを承認すること、個性を受容することまでをふくめたものであること。

「高まり合う」とは…活動の喜び（成就感や達成感などのプラスの感情経験）を味わい、次の活動への期待や意欲をもち、生かそうとすること。

2 研究仮説

自分や友達の存在やよさをみとめ、みんなの願いの実現に向けて実践すれば、活動の喜びを味わい、さらに高まり合う学級集団になるだろう。

自分や友達のよさを認め合うための工夫 (視点1)

- ・学習活動全体を通しての自己評価・相互評価 (「よかったさがし」など)
- ・みとめ合う場の設定 (よかったことの紹介など)

僕も役に立っているなあ!

役に立ってみたいなあ。

よさってなんだろう。あのこのよいところって、どんなところかなあ。

多くの友達を意識的に見る場を設定しよう。(シークレットファイン) よい気づきを広めよう。

自己存在感・自己有用感が高まっているぞ。

シークレットファインとは・・・
あらかじめ自分の見る子が決められています。(授業前にカードを引いているのです。)活動の中で、その子を意識してみている。発言することだけでなく、いろいろな様子を互いに「認め合おう」ということなのです。

願いの実現に向けて実践するための工夫 (視点2)

・問題解決の一連の活動を積み重ねることによる活動意欲の高まり

★願いや思いを共有化する	★考えや思いを伝え合う	★次への意欲を高める
「何のために？」 ・学級・学校生活への振り返り ・学級活動コーナーと議題箱の設置 ・児童による必要感のある議題選び ・司会グループへの事前指導	「どうやるの？」 ・学級活動カードを早めに配り、自分の考えをもつ時間の確保 ・事前のコメント入れによる安心感の醸成	「どうだった？」 ・全体での振り返りの場の設定 ・個々のプラスの感情経験を集団として共有し、次への意欲を喚起する教師の助言

どのように児童が問題解決していくのか過程を見守る。

本当にぼくたちのやりたいことをやっているの？
先生の思い通りでなくていいの？

教師がしっかりとした視点を持ち、活動の流れに十分に気を配りながら子どもたちを見守ろう！

今回の活動、やってみてどうだった？

事前の指導の時、みんなが話の流れがわかるような話合いの目当て、柱立てを司会グループといっしょに相談しよう。

早めに議題を知らせ、自分の意見もったり友達と相談したりする時間を保障しよう。会が始まる前に、コメントを入れ、安心して表現できるように支援しよう。

みんなでやったから楽しかった。またやりたい！

今回の学級活動、何について話し合うのかなあ。

これって本当に言っているのかなあ。反対されたらいやだなあ。

やったー！！

★学級活動カードの工夫

願いを共有化し、活動の焦点化を図る。	考えを整理し、意欲的に表現し合う。	自己評価や相互評価を行い、個の振り返りを集団に広げる。
--------------------	-------------------	-----------------------------

支持的風土に根ざした学級集団

【事後の活動】

11月下旬に『こだま学級との交流会』
を实践することができた。司会の進行のも
とボールけりゲームと自分たちで考えたルー
ルでのドッジボールを楽しむことができた。



<一連の活動の振り返り>

やったねカード

話し合いには、すごく
時間がかかったけど、
それだけいい交流会
ができた。またやり
たいな!

名前 ()

やったねカード

この交流会はこだ
まさんだけが楽しむの
ではなく、みんなが楽
しめたので大成功でした。
話し合いや遊びの計画
をみんなで作って
よかったです。

名前 ()

<考 察>

- ・『話し合いカード』を事前に配布し、教師が児童の考えや意見に賞賛や励ましを記入することで、話し合い活動では活発に意見がかわされた。
- ・話し合い活動のなかで教師が見守る姿勢をとることで、自分たちの活動であるという意識が育ち、事後の活動での役割分担や交流会でのゲームなどで一人一人が積極的に行動していた。
- ・一連の行動の最後に振り返りの場を設けることで、プラスの感情経験を味わわせ、自らの成長に気付かせることができた。

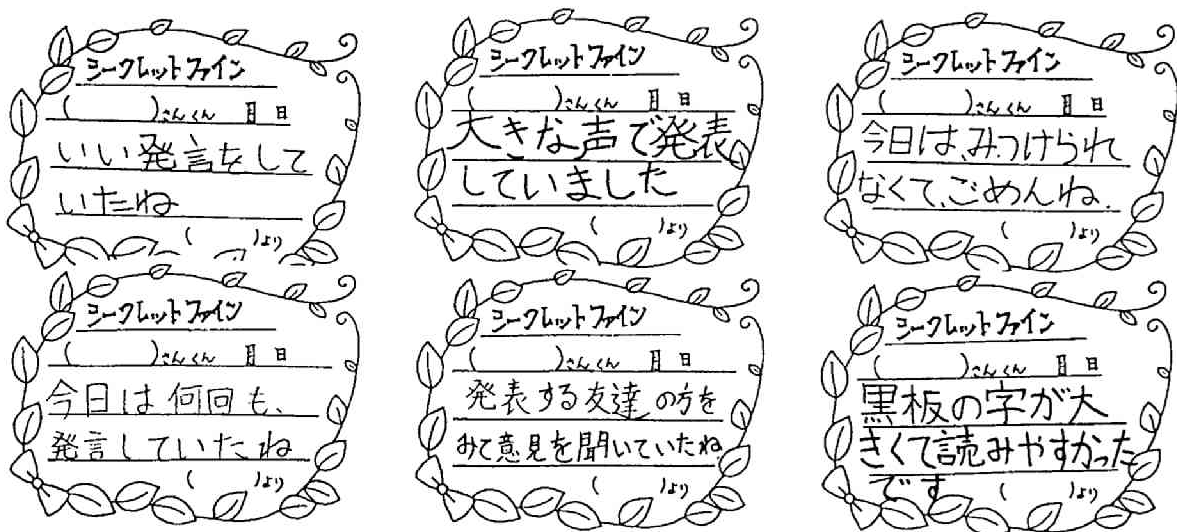
望ましい集団活動を進めるためには、子どもたちの手でその活動が展開されることが必要である。そこでの教師の役割は、感動を伝え、その子なりの発達やよさ、今までの学級活動にはなかった新しい発言・態度・行動、集団として育ってきている傾向などを事前・事中・事後の中で気付かせ、具体的に褒めることである。

<指導の具体的な事例>



シークレットファインは、互いを知り・みとめ合うための“きっかけ”の活動として取り組んだ。この積み重ねにより、多くの友達のよさを見つけ出す視点が自然に見られるようになり、この活動を取り上げる事がなくなる状態を目指した。

<初期のころの記述>



<積み重ねによる記述>



5 まとめ

(1) 研究の成果

視点1 自分や友達によさを認め合うための工夫

自己評価・相互評価の場を平素の学習活動から工夫した。また、支持的風土を醸成する取り組みの一つとしてシークレットファインを導入し、よい気づきを全体へと広め合った。この結果、一人一人が自己存在感・自己有用感をもち、より意識的に友達の存在やよさをみとめ合おうとする態度が活動カードの記述・発言等に多く見られるようになった。

視点2 願いの実現に向けて実践するための工夫

ア 願いや思いを共有化するための工夫（問題を発見する段階）

学校・学級生活への振り返りに基づいた議題の掘り起こしと、それを共有化するための学級活動コーナー等の設置により、必要感・切実感のある議題を引き出すことができた。司会グループへの事前指導では、話合いの目当てや柱立てにポイントを置き指導を工夫することで、学級全体の思いや願いの焦点化が十分になされた。

イ 考えや思いを伝え合うための工夫（思いや願いの実現に向けて追求する段階）

議題を早めに知らせ、児童が自分の考えをもったり友達と相談したりする時間を保障した。また、活動カードには教師がコメントや励ましの言葉を書き添えることで、児童は安心して話合いに臨み、意欲的に意見を述べるようになった。

ウ 次への意欲を高めるための工夫（振り返りの段階）

一連の活動の中で、振り返りの場を設定し、望ましい自己評価・相互評価が行われるよう工夫した。児童は、自他やクラス全体によさに気づき、成就感・達成感を味わって集団の高まりを意識し、次への意欲を高めることができた。

(2) 今後の課題

- ・ 各学年の発達段階や各教科・領域との関連性についての研究を深め、学級活動の場において高学年の児童に身に付けさせたい力を、整理し明確にする。
- ・ 児童の意欲を高めるための、活動を見取る視点や助言のあり方についてさらに研究を深める。

V かかわり合う喜びのもてる児童会活動

——代表委員会活動への支援の工夫——

(児童会活動分科会)

1 主題設定の理由

児童会活動は、全児童が参加して、自分たちの学校生活の充実と向上を目指して、学級や学年の枠を越えた人間関係の中で協力し、諸問題を解決する集団活動である。その中核をなすのが代表委員会活動である。代表委員会活動は、主として高学年の代表者が参加して、学校生活に関する諸問題を話し合い、解決を図るための活動であり、全校児童の意向を反映し、学校生活をより向上発展させるために自発的、自治的に行われる活動である。したがって、代表委員が生き生きとその活動を行えば、児童会活動も活性化され、学校生活も向上していくことが期待できよう。

しかし、児童会活動の実態をみると、低学年児童は単に集会や行事に参加するだけ、高学年でも一部の児童が中心となって活動しているだけという傾向がある。また、代表委員を経験したことのある児童のほとんどが、仕事や発言がうまくできた時に成就感や満足感を感じ、「代表委員をやってよかった」という喜びをもっている。それにもかかわらず、異学年とのかかわりが十分ではなかったり、学年が進むにつれ代表委員を「また、やりたい」という児童が減る傾向が見られたりする。これにはさまざまな原因が考えられるが、子どもたちを取り巻く状況から来る人間関係の稀薄化と無関係ではないと思われた。代表委員は「みんなの役に立ちたい」という意欲をもって代表委員に臨むが、おおむね月1回の活動だけでは委員相互の人間的なふれ合いを深め、より意欲的に活動できる状態には必ずしもなり得ていない。

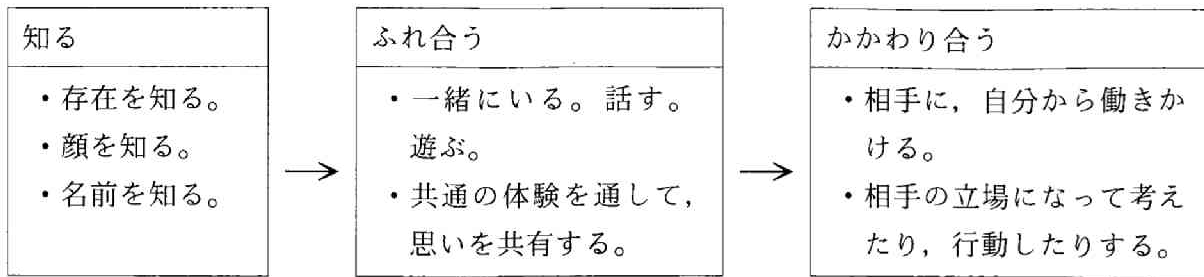
全校児童にとって学級と代表委員会の双方向の流れを盛んにすることは、自分の思いが通じる児童会への所属感につながるであろう。代表委員会をそのような魅力的な場にしていきたい。それには、同じ目的をもつ委員相互のかかわりを大切にし、一人一人のもてる力を十分に発揮できる意欲的な代表委員会にすることが重要である。そのために、代表委員会への支援を工夫することに焦点を当てることにした。

代表委員会活動が活発になれば、児童会活動も活性化する。そして、児童会活動で意欲的な活動を繰り返す中で、子どもたちが協力し合い、試行錯誤を繰り返し、失敗や苦勞を乗り越えた時、子どもたちは人を好きになり、自分に自信がもて、子ども同士のかかわりがより深いものになると考えた。現在の活動に、新たな人間関係の広がりや深まりを見付けることにより、喜びのもてる児童会活動になるものと確信する。

以上のことから、本主題を設定した。

2 研究仮説

児童会活動は、普段顔を合わせることの少ない異学年の児童が共に活動するところに特色がある。その際に、人間関係が深まって行く過程を、次のように考えた。



今まで知らなかった者同士の間関係が深まっていくためには、次の二つのことが重要と考える。一つは、「相手がどんなことを考えているのか、その思いを知ること」である。知り合った者同士がお互いの考えや人柄についての理解を深めれば、思いやりも深くなり、相手と積極的にかかわっていかうとするであろう。もう一つは、「人とふれ合い、共に活動すること」である。学級・学年が異なる人たちと活動する楽しさを知れば、人とふれ合うことに喜びをもち、さらに進んで、人とかかわろうとするようになるであろう。

したがって、代表委員会において、「学校のみんなが楽しくやることや、みんなの役に立つことを、みんなの協力でやり遂げよう」とするためには、子どもたちが共通の体験をしてふれ合いを深めていくことが必要である。そして、代表委員が全校のみんなのことを考えながら活動することが、全校児童にとって充実感のある活動となり、代表委員自身の成就感や満足感につながる。このような活動を通して、子どもたちが人とかかわりあう喜びをもつことができるだろうと考えた。

以上のような観点から、研究仮説を次のように設定した。

— 研 究 仮 説 —

代表委員が、代表委員同士や全校児童の思いを知り、児童会活動を全校児童が楽しくふれ合える場にしていけば、かかわり合う喜びのもてる児童会活動になるであろう。

3 研究の視点と手立て

(1) お互いの思いを知るための支援の工夫 (代表委員同士、代表委員と全校児童)	(2) 全校のみんなが楽しくふれ合えるようにするための支援の工夫
① 代表委員がお互いの思いを知る <input type="checkbox"/> 席札の工夫 <input type="checkbox"/> 座席の工夫 <input type="checkbox"/> 異学年小グループの活用 <input type="checkbox"/> 話し合い計画書の活用	① 計画・準備のとき <input type="checkbox"/> 提案理由（視点）の確認 <input type="checkbox"/> アンケートの活用 <input type="checkbox"/> 情報提供の工夫 <input type="checkbox"/> 異学年での係分担
② 代表委員がみんなの思いを知る <input type="checkbox"/> アンケートの工夫 <input type="checkbox"/> 黒板記録の工夫 <input type="checkbox"/> メモ・カードの工夫	② 実践活動のとき <input type="checkbox"/> 場の設定の工夫（多目的室の活用） <input type="checkbox"/> 個人カードの工夫

<p>③ 代表委員の活動の流れが見える</p> <ul style="list-style-type: none"> ○掲示コーナーの工夫 ○代表委員会便りの工夫 ○朝会時でのお知らせの工夫 ○全校放送の利用 	<p>③ 振り返りのとき</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自己評価の工夫（ふりかえりカード） ○相互評価の工夫（よかったカード お手紙の活用）
--	---

実践事例1 議題 『学芸会のスローガンを考えよう』

＜活動概要＞

【事前の活動】

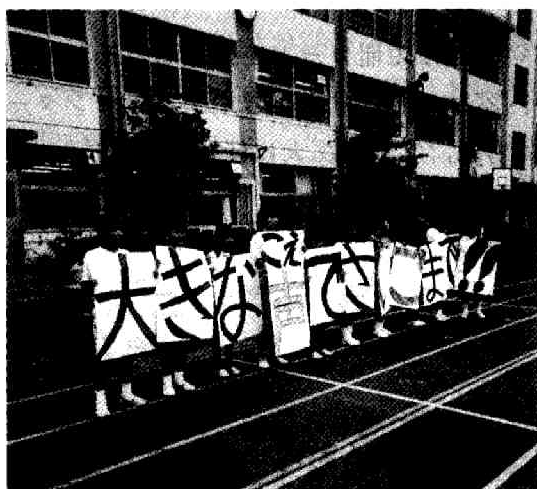
本校の代表委員会は、3年生以上のクラス代表と、各委員会の委員長から構成されている。また、前期・後期の2期制をとっている。今回は、後期最初の代表委員会である。事前に臨時の代表委員会をもち、自己紹介を行い、お互いに知り合う機会をもった。

（視点1-①）

【事中の活動】（学芸会のスローガンの話し合い）

異学年の意見の交流ができ、お互いの思いを知ることができるように、座席を異学年同士が近くなるよう配置した。また、全体の場では意見の発表ができなくても、小グループならできる場合も多いので、意見がなかなか出なかった場合には、近くの児童が机を移動し、4人ずつの班をつくって話し合うことにした。

（視点1-①）



まず、学芸会のスローガンを考えるに当たって、どういう観点から考えていけばいいかを話し合った。「1年生に分かるようなもの」「みんなで協力していこうというようなもの」「やる気がでてくるようなもの」などの意見が出された。（視点2-①）

その2週間後、臨時の代表委員会をもち、前回の話し合いをもとに、スローガンを考えた。「分かりやすく楽しい学芸会に」「大きな声で、見る人も楽しくなるように」など、多くの意見が出た。前回確認された「スローガンを考えるときの観点」から、どれがよくないかではなく、どれがいいか、意見を出し合い、「大きな声で、最後まで」に決定した。（視点2-①）

【事後の活動】

代表委員会の活動が全校に見えるようにするため、代表委員会新聞を出した。その際、スローガンを考えるとき、どういう観点で話し合ったかを記し、代表委員みんなの思いが伝わるようにした。さらに、全校朝会でも、全校児童に紹介した。（視点1-③）

<考察>

視点1 お互いの思いを知るための支援の工夫

座席の配置を工夫したり、4人の班をつくって話し合いをしたことで、これまでよりお互いの思いを知ることができた。特に、6年生が下級生の児童の意見をうまくくみ取っていくよう努力していたのはよかった。

視点2 全校のみんなが楽しくふれ合えるようにするための工夫

スローガンを考えるときに、どういう観点から考えていけばいいかを話し合ったことも効果的であった。これまでは、教師の方から示すことが多かったのだが、児童自身が考えることで、何のためにスローガンをつくるのかという目的がより明確になった。

実践事例2 活動『楽しい子ども祭りにしよう』

<<活動概要>>

【事前の活動】

年度始めに、ロングレク集会で何をやりたいかを各学級で話し合い、今年度も3年生以上が学級ごとで工夫してお店をつくり、全校児童が回って楽しむ『子ども祭り』に決まった。

2学期第1回の代表委員会で、代表委員一人一人がもっとお互いを知り合うために、自己紹介をしたり、3年生と5年生、4年生と6年生を隣り合わせた座席にしたりして、話し合わせるようにした。

(視点1-①)

まず、各学級でやりたいお店の内容や場所を書いてきた短冊カードを掲示し、それぞれの希望にできるだけ沿うように調整した。お店の内容は、おぼけやしきやゲームセンター的なものが多かったが、児童の願いを生かしたいと考え、学級の工夫に任せることにした。

(視点2-①)

また、集会・ポスター・ビデオ・ちらし・地図などのPR方法や、どのお店にもたくさんのお客さんが来るように、いろいろなお店を回る工夫について話し合った。

(視点2-①)

【事中の活動】(子ども祭り)

1・2年生はお客さん、3年生以上は前半と後半が交代で、学級の係の担当や、お客さんになった。全校児童が多くの学級を意欲的に回り、3年生以上は自分たちのお店に、たくさんのお客さんが来てもらうための工夫を行った。多くの学級のお店に参加する中で、様々な場面で異学年の児童や、教師との交流が見られた。

(視点2-②)

【事後の活動】

活動後、各学級で反省を話し合い、代表委員会でそれを集約した。今回はその他に、全校児童が“おたよりカード”を書いた。“おたよりカード”に子ども祭りの感想や学級宛ての手紙を書き、活動全体への感想は掲示し、学級宛てのお便りはその学級に届けた。その中で、『よかった、楽しかった、もっとこうし

山田小子どもまつり パズルポルト

行くのは 学年 組の
名前を
書いて

もし、パズルポルトをおとしたら
2かいのかいぎしつ(本部)に
きてみてください。

お考えいたら、本部まで
とびつけて下さい。

クラスや学年関係なく
仲良くみんなが
子どもまつりにいこう

チェック表	いっしょに遊んでほしいところ もみんなが楽しめるように		
クラス	お店のなまえ	1日目	2日目
3の1	宝まがし		
3の2	ゲームセンター		
4の1	メイロランド		
4の2	天国と地獄		
5の1	のりわけ教室		
5の2	又買センター かんちりーの		
6の1	くだりかえ屋		
6の2	恐竜のカイニク		

3年生以上は 前半 後半をまわって下さい
1年生 2年生

てほしかった』などの思いを伝え合った。

(視点2-③)

<考察>

視点1 お互いの思いを知るための支援の工夫

代表委員が、学級の意見だけでなく、気軽に自分の考えが言えるように、異学年小グループでの話し合いを取り入れた。他の学年の思いを知った上での話し合いになったので、全校みんなで楽しめるようにするためのルールや、盛り上げるための宣伝活動などを話し合うことができた。係分担では、自然に異学年で取り組むようになり、話し合ったことを全校に知らせる集会活動などに意欲的に取り組んでいた。

視点2 全校のみんなが楽しくふれ合えるようにするための支援の工夫

任期交代後初めての活動であったが、『子ども祭り』のときのみんなの楽しそうな表情を見たり、“おたよりカード”に書かれた言葉を読んだりして、代表委員としての自覚が高まり、次の活動への意欲につながった。

5 まとめ

(1) 研究の成果

視点1 お互いの思いを知るための支援の工夫

- 話し合い活動の中で、座席の工夫をしたり、小グループをつくったりする異学年の交流を通し、代表委員同士のふれ合いをもたせることにより、活発な話し合いができた。
- 代表委員会の話し合いの内容を掲示したり、代表委員会新聞では、話し合いの過程を記したりすることで、代表委員と全校児童双方向の願いや意見を明らかにすることができた。

視点2 全校のみんなが楽しくふれ合えるようにするための支援の工夫

- 学級の意見を事前に掲示したり、代表委員会での話し合いに視点を学級に示したりするなど、学級とのかかわりを明確にした結果、代表委員会への関心が強まった。
- 事後に児童が感想を記す中で、ふれ合いを一層深めることができた。

(2) 今後の課題

児童の話し合い活動や準備の時間的制約が増す中でも、工夫次第ではふれ合いの場をよりもてるようになってきた。児童のかかわり合い活動の意義を明確にし、教師間の共通理解を図り、見通しをもった計画を立て、実践をする中で、さらに内容・方法について検討を重ねていきたい。

また、代表委員会で取り組む議題や活動が、異学年と十分にかかわり合えるようなものとなっているかを見直していきたい。児童への情報提供を行い、学校生活に関する諸問題について、気付くことができるような力を育てていく必要がある。

自分たちの活動が全校のためになっているという代表委員の成就感を大切に、そこまでの経緯を振り返らせ、自信をもたせたい。そうした活動を積み重ね、各学級や委員会、クラブ活動においても、一人一人の児童が生かされ、集団として高まるような指導をしていくことが課題である。

VI 研究のまとめ



運営側 (代表委員)

参加側 (全校)

学級活動
高学年分科会

- ・支持的風土を醸成するための活動を行い、よい気付きを全体に広めるた。そのことにより、一人一人が自己存在感・自己有用感をもち、より意識的に友達存在やよさを見とめ合おうとする態度がみられた。
- ・焦点化された議題の下で、児童が安心感をもって話し合ったり、実践したりすることで成就感・達成感を味わうことができた。このような活動の積み重ねにより、次への意欲が高まった。

「役に立っているなあ。」

「あの考えもいいなあ。」

「みんなのできたから
楽しいんだ。」



「みんなの願いや
意見も聞こう。」
「みんなにも
知らせてあげよう!。」
「みんなが知って
くれてうれしいなあ。」
「4年生の意見も
聞いてみたいなあ。」

学級活動
中学年分科会

- ・「心をやわらげる活動」や「人とかかわり方の指導」を、全学校生活において意図的に取り入れたことにより、かかわり合おうとし、認め合おうとする気持ちが育った。そのことが基盤になり、自主的・実践的活動につながった。
- ・よいとこみつけ、小集団での活動など、指導の工夫の積み重ねにより、よさや違いに気付き、認め合おうとする気持ちが育っている。
- ・一人一人の思いや願いを全体に返し、励ますことで、活動の意欲が引き出した。

「ここでなら
自分の考えもいえるな。」

「あの子、すごいなあ。」



「わたしも意見を
言ってみようかな。」
「意見を言えそうだな。」

- ・学級とのかかわりを明確にすることで、代表委員会への関心が高まった。

「代表委員って
どんなことを
しているのかなあ。」

「今度はなにをするんだろう。」

「やてみたい!!」

「楽しみだなあ。」

学級活動
低学年分科会

- ・「思いきりやってみようこと」を取り上げ、様々な活動を取り上げたことで、「こんなこともできる。」と楽しさの体験が広がり、意欲的な活動ができた。
- ・振り返りの活動を続けることで、一人一人の思いを聞き・話し合える活動ができた。この活動を通し、あたたかい人間関係が育っている。

「こんなこともできた!」

「たのしかった!」

「また一緒に
やってみようよ!」



児童会活動分科会